2019年10月09日 本紙 特集 012頁 (C)神奈川新聞社 無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

短編小説 佳作②

「鶴見線」

飯塚 ひろみ 作

父の油絵の個展を開こうと思いついたのは、父が外出先で意識を失い救急搬送された病院からの帰り道だった。原因は脳梗塞で、後遺症が残り退院しても介護施設でなければ暮らせないだろうと医師に言われた日、病院から駅に向かうバスの窓から「貸スペース」という文字が見えた。その時、個展を開こうと閃いたのだ。画家になりたいという夢を諦めきれなかった父は、小さな金物店を営む傍ら油絵を描き続けてきた。おそらく夥しい枚数の油絵が「アトリエ」と称して借りているアパートの部屋に残っているはずだ。それを片付けなければと思った。由里子の頭にあるのはこれからの費用のことで、個展を開いて親孝行をしようなど思ってもいなかった。父がどれくらいの年金を受け取っているのかはわからないが、アトリエを借りる余裕などなくなるだろう。個展を開いて絵を買ってくれる人がいればありがたい。父のこれからの介護、一人暮らしになる母の生活、貯金はいくらあるのだろうか。いずれにしてもアパートは早く解約した方がいい。「片付けなくては」という強迫感に近い思いから、由里子は個展の準備を始めた。

由里子が住んでいる浦和から両親が暮らす鶴見までは一時間ほど京浜東北線に揺られる。今日は一週間分の着替えや身の回りの物を詰め込んだ大型のキャリーケースを持っていた。父は昨日、集中治療室から一般病棟に移った。これまでの十日間、浦和と鶴見を何度も行き来していたが、今回はしばらく実家に泊まる予定だった。東京を抜けるといつもは明るい土地に向かっているように感じるのに、今日は暗い雲の中へ向かっているような気分だ。多摩川を渡ると沿線に川崎の桜並木が続く。鶴見は間もなくだ。ふーうっと大きな息を吐いて由里子は座席から立ち上がった。

鶴見で降りると西口のバスターミナルへ向かう。父が入院している三ツ池総合病院はバスでさらに十分ほどかかる。大きなキャリーケースを引きずって病院へ行くのは気が引けたが、「貸スペース」の文字があった場所をもう一度よく確認したかった。バスは鶴見駅を出るとしばらく商店街を走る。両側に店舗の並ぶ細い道をゆっくり進むと、シャッターが下りた空き店舗に、「貸スペース」という貼り紙がしてあった。間口はあまり大きくないが駅からは近い。画廊のように使えるかどうかは分からなかったが、個展を開くにはちょうど良い場所に思えた。

昨夜、弟の進に電話をして父の個展を開きたいと相談していた。機械メーカーに勤める進は名古屋に単身赴任している。

「俺は離れていてお父さんが倒れてもすぐに駆け付けられなかったくらいだから、お母さんが良ければいいんじゃない。姉さんに任せるよ。金が必要なら協力するから」

思った通りの答えが返ってきた。弟が賛成なら父と母に個展を開くように勧めるだけだった。お金はいくらかかるのだろう、いよいよ父の道楽の始末をすることになるのか、と思いながら病院に向かった。父の絵に取り組む姿勢など、由里子はいままで知ろうともしなかった。むしろ恨めしく思った時期もある。県や市の美術展で入賞したこともあったが画家としての収入はなく、父が絵に打ち込めば打ち込む程家計を苦しめた。自分が大学進学を諦めたのも父の道楽が原因と思い、父が県知事賞を取った美術展さえ見に行かなかった。

父の病室に着くと、そこに母ともう一人、年配の女性がいた。田村さんというその年配女性は父の絵画教室の生徒だという。個展の話を切り出すには丁度いい、と由里子は思った。父は酸素吸入のための管を付けて眠っている。白い髭が伸び、やつれた顔は急に老けて見える。目を覚ましても意識があまりはっきりとしていないようだ、と母が言う。

「お父さん、右半身に麻痺が残ってもう絵が描けないのよ」

母が呟くように続ける。知っているよ、と言いそうになって、由里子は口をつぐんだ。父に後遺症が残ると医師に言われた時から、母は何度もその言葉を繰り返している。父が倒れてから、母は急に頼りなくなった。その心配もあって一週間、両親の傍にいようと準備をしてきたのだ。田村さんも交え三人で休憩室に行き、父の個展を開きたいと切り出してみた。今でなくてもと母は渋ったが、今から準備して二、三か月先に開くことになるから、その頃にはお父さんも退院できているだろうし、と説得した。田村さんは絵画教室の生徒に連絡して協力すると乗り気で、計画はうまく運びそうだった。「アパートを片付けたい」という本音は母に悟られないよう、「お父さんの生涯の記念となるように」と押し切った。田村さんが帰った後、由里子はしばらく母と二人で父の寝顔を見ていが、母の顔色の悪さの方が気になった。

両親は鶴見駅近くのマンションで暮らしていた。そこは「島田金物店」があった場所だ。かつては小さな商店が肩を寄せるように並び商店街を作っていた。店舗兼住宅の小さな家で由里子は育った。第二次世界大戦の空襲で焼け野原となった土地に祖父が店を出したのが、「島田金物店」の始まりだ。商店街は闇市のような場所から始まっていた。父がその店を継ぎ、鍋などの日用品の販売の他に自転車の修理もしていた。鶴見の沿岸部は明治の頃から埋め立てが進み、大規模な工場がいくつも作られていた。由里子が子供の頃は、工場に働きに行く人達が自転車のパンク修理やタイヤに空気を入れるために店に寄った。朝は工場へ向かう人の流れが力強い活気を商店街にもたらし、夜は仕事を終えた人達の醸す酒混じりの熱気と喧騒が街を包んだ。貧しいけれど何かしら明るい時代だった。

「平成」の時代に変わった頃から「島田金物店」も商店街も活気を失っていった。商店街を再開発し、マンションを建てる話が出始めたのはその頃か、いやもう少し早かったのかもしれない。由里子は結婚で家を出ていたので、当時の様子はわからない。実家に帰るたびに錆の目立つシャッターを下ろしたままの店が増えていくように見えた。そして、いくばくかの補償金と事業提供者としてマンションの一室を手に入れ、父は「島田金物店」を閉じた。

店を閉じてからの父は若い頃からの夢を実現させた。絵描きとしての生活である。六十歳を過ぎてはいたが、それからの父は生き生きとしてきたように見えた。マンションでは手狭だからとアパートの一室をアトリエとして借り、そこで絵画教室も開いた。それまでに県の美術展で県知事賞を取るなどの実績があり、地域の高齢者向け絵画教室の講師をしていたので、生徒は随分集まったようだ。母は近くの総菜店でパートの仕事をし、生活も安定しているようだった。「今が一番いいかもね」と母は嬉しそうに言っていた。両親なりの幸福な老後を手に入れていたのだろうと、由里子は安心していた。

翌日、鶴見線に乗って鶴見小野駅に向かう。父が借りている「アトリエ」に行くためだ。鶴見線の電車に乗るのは四十年ぶりだった。鶴見線の記憶は苦く、あまり思い出さないできた。高校卒業後、由里子は一年程この電車で石油精製工場に通った。高校は進学校で就職したのはクラスでも由里子一人だった。当然大学に進学するつもりでいた由里子に、父は「女の子を大学に入れるお金は家にはない。行くなら自分で稼いでからにしろ」と言ったのだ。将来の希望、夢、そんなものがすべて消えたように思えた。学校の紹介で就職先は決めたものの、高校の卒業式には出なかった。一年働いて、働きながら勉強し、進学費用を貯めた。工場で支給される事務服を着て、化粧もせず、流行の服には目もくれず、父の言うように学費を貯めた。由里子は公立の短大を受験し、合格して会社を辞めた。それから鶴見線には一度も乗っていなかった。

鶴見小野駅で田村さんと待ち合わせをしていた。アトリエは古い木造アパートの一階の角部屋だった。ドアに「島田絵画教室」と花模様のトールペイントで描かれた札が下がっている。鍵を開け、中に入ると油や絵の具の匂いがした。内部の仕切りを外してアパートの部屋全体を絵を描くスペースにしているので、意外に広く感じる。「アトリエ」という言葉通りの空間だった。クリーム色のカーテンを開けるとコンテナを積んだ大型トラックの走る道路が見えた。

「先生は風景画がお得意だったから、わたしたちもよく外へ出かけて描いたんですよ」

田村さんはそう言いながら、慣れた様子で押し入れを開け、下の段にある大きな油絵を何枚か取りだした。灰色の建物や鉄塔、太い管が側面に巻き付くような建物、どれも工場の絵ばかりだった。美しいとは言い難いが見るものを圧倒するような迫力があった。背景が黒く塗られ、星のようにライトが輝く夜景のものもある。見たところカンバスの大きさは十号から二十号、それを超えるようなものもあり、家庭に飾れるような絵ではなかった。

「教室で写生に行くのは三ツ池公園だったんですが、先生は工場を描くのがお好きで、わたしたちも一度、海芝浦に行ってベイブリッジや鶴見つばさ橋を描いたんですよ。でも風が強くてそれきりでやめました」

由里子も押し入れの中に頭を入れるようにして絵を見たが、厳つい工場の風景ばかりで花や静物、公園の風景など無難な絵は見当たらない。「売れそうにないな」由里子は少し落胆した。部屋に置かれている絵は花や生物を描いたものもいくつかあったが、明らかに絵画教室の生徒の作品と思われる絵だった。それらの絵に比べると父の筆遣いは力強さが違う。田村さんは更に何かを捜すように、工場の描かれた油絵を手で引き出しては見ていたが、「ああ、これこれ」と言いながら、一枚の絵を由里子に見せた。あまり大きくはない、工場の絵だ。背景が濃紺に塗られ、黄色いライトに浮かびあがる工場の夜景だった。

「この絵は先生の一番のお気に入りなんです」

影のような工場の建物の前面には太い配管らしきものが薄い茶色で描かれている。工場の背後には丸い球型の建物が更に濃い色で影のように浮かび上がって見える。どこかで見たような風景だった。

教室に置いていた自分の絵の具箱を持ち帰るのが目的だったらしく、田村さんは十分もすると「他の生徒さんにも自分の物は取りにくるよう言っておきますね」と言い残し、帰っていった。

由里子の目の前には夜の工場を描いた絵があった。よく見ると、絵の具が何層にも塗り重ねられている。何気なく裏を返すと「生きる」とかすれた黒い文字が書いてあった。この絵の題名なのだろうか。いつ頃描いたのか、日付や年代はどこにも記されていない。

「お父さん、右半身に麻痺が残ってもう絵が描けないのよ」母の呟く言葉を思い出し、このアトリエで好きな絵を描いている父の満足そうな顔が目に浮かんだ。

部屋を見渡すと、棚に何冊ものスケッチブックが並べて置かれていた。近寄ってみると表紙が色褪せ、黄ばんでいる物もあった。一冊、手に取ってみた。開くとやはりそこにも工場の絵が描かれている。石油タンクを乗せた貨物列車が連なる絵もあった。もう一度押し入れにあった油絵を何枚か見てみる。どの風景にも人の姿はないのに、工場は明らかに稼働しているように見える。排気口から白い蒸気が吐き出されているからだろうか。見慣れてくると、父の描いた工場は生き物のようでもあった。工場の絵を買う人はいるだろうか。由里子はスケッチブックを一冊持ち、個展を開くことはやめようかと思いながら、部屋を出た。

鶴見小野駅に戻ると上り電車は出たばかりだった。平日の昼に走る電車の本数は少ない。ふと、下り線に乗ってみようかと思った。自分が四十年前に働いていた石油精製工場を見て帰ろうと思ったのだ。人気のない駅で電車を待ちながら、スケッチブックを開いた。父はどうしてこれほど工場の姿に魅かれたのだろうか。裏に「生きる」と書かれた絵はどこで描いたのだろうか。この鶴見線の沿線で何年、いや何十年も描き続けた工場の風景。まるで生き物のように見えた父の描いた工場。昼も夜も動き続け、生産し続ける巨大な生き物の姿。

「扇町」行きの電車が来た。四十年前、朝の電車は沿線の工場に働きに向かう人々で満員だった。思い詰め、意地になって働いた自分もその中にいた。「浅野」、「安善」と駅を過ぎると人家は減り、車窓からはフェンスと桜並木、その先にある広大な敷地の工場が見えてくる。製鉄、製鋼工場、ガラス製造工場、石油精製工場、沿線の工場はどこか武骨な感じの工場ばかりだった。それがこの国の産業と繁栄を支えてきたのだ。父はこの工場街の持つ逞しい生命力を描きたかったのだろうか。電車の前方にかつて勤めた石油精製工場が見えた時、由里子は初めて気づいた。「生きる」と書かれた夜の工場はこの場所を描いていたのだ。「生きる」という言葉を選んだ父の胸の内、描いた絵に込めた思い、いままでそんなことを考えたことは一度もなかった。何か熱いものが悔いと共に由里子を揺さぶった。

帰りにあのアパートに戻ろう。そして工場ばかり描いてあった何枚もの油絵をもう一度見てみよう。絵を描き続ける父ともっと話し合ってくれれば良かった。父の絵を喜んで見てくれる人がいるかもしれない。かつてこの沿線の工場で働き、生きてきた人々。絵は売れなくてもいい、個展を開いて父の描く力強い工場を見てもらおう。電車はスピードを落とし、工業地帯の果てに辿り着くように終着駅に着いた。

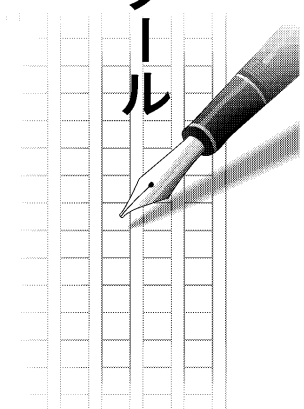
講評

地味な題材であるが、静かな筆致で時代の移り変わりをきっちりと描き出している。その時代の移り変わりに、人の老いが重なってくる。活気ある過去の光景と、さびれた現在のコントラストが鮮やかに浮かび上がる。

（審査員・角田　光代）

いいづか・ひろみ　本名・飯塚弘美（いいづか・ひろみ）1952年生まれ。団体職員。横浜市金沢区

第49回 神奈川新聞 文芸コンクール



作品の掲載に当たっては、原文通りを原則としています。佳作作品は順次掲載します。

次回は10日の予定

現代詩 佳作③

対峙する

山口 真喜 作

泰山木のクリーム色の花が
空を見上げて咲いている
この花はいつも
太陽に向き合うことを恐れていない

身の程も知らぬことに
この木と対峙したいと思った

公園の真ん中の小さな木立の中で
ここで生きると決心した木は
地面にめりめりと根を這わせ
周りの養分を吸い上げながら　空に向かってゆく

それでも
柔らかい大きな花びらは
雄しべと雌しべの円錐状の果穂を
照りつける陽ざしから守ろうと
風に合わせて、ゆっくりと内向きになる

毎朝、この木に話しかけてみた
艶やかな楕円形の葉たちは
花をいたく尊敬していて
空を見上げるその白い凜々しさを
決して邪魔をしない

私が泰山木の下に立つと
大きな葉たちはざわざわとあざ笑い
花や真っすぐに佇む幹には
一向に取り次いではくれない

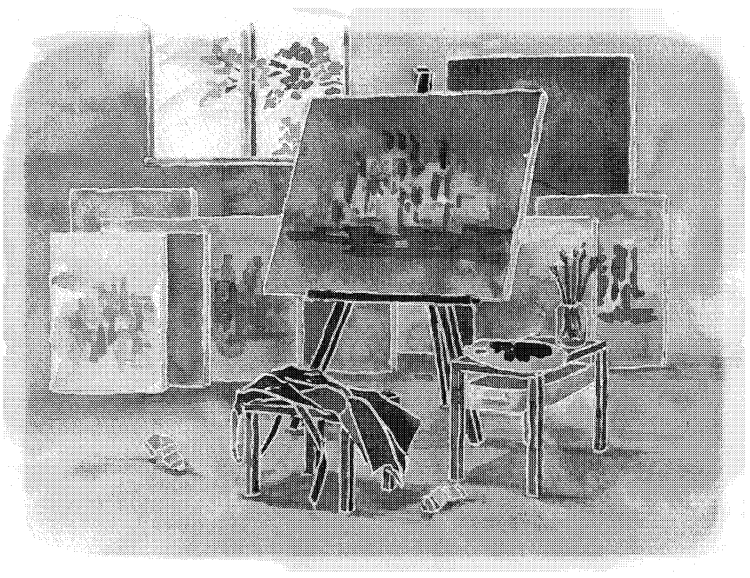
やがて
種袋から、赤い種が
ベロを出すように顔をのぞかせた

やまぐち・まき　1947年生まれ。無職。横浜市緑区

講評

作者は公園の木を眺め、自分より力の大きなもの、つまり人生の苦難に立ち向かっていこう、あるいは立ち向かってきたんだという強い思いがあったのだと思う。逆に、泰山木に自分自身の姿を見ているのかもしれない。力強い一篇。

（審査員・金井　雄二）



etsumi　画